



上村 かずさん

Uemura Kazu

〔上豊内区〕

うえむら・かず / 歌人。創立20周年を迎えた甲佐短歌会の発足時からのメンバー。同会では、今年7月に『創立20周年記念短歌作品集』を発売。

心を惹かれた風景や思いを 短歌に乗せて表現する楽しさ

「そのときに惹（ひ）かれた風景や心の内を、歌に乗せて表現するのが短歌の魅力です」と語るのは、創立20周年を迎えた甲佐短歌会の発足当初からの会員である上村かずさん。

「歌を詠むときの感動や気持

ちを、短歌という形にすることが面白さであるとともに、以前に詠んだ歌を読み返して、当時の感動が鮮やかに心によみがえってくることも楽しさです」と短歌の奥深さを語る。

生家が寺である上村さんは、

小さいころから和歌や古典などの書物に囲まれ親しんで育った。終戦後に甲佐町に嫁ぎ、12人の大家族を守る生活。子どもたちが巣立ってから、「以前から興味があり習ってみたいかった」習字や古典の教室に通い始めた。古典を勉強するにつれ、和歌への思いが募り、清村守町公民館長（当時）に短歌講座の開講を頼んで創立したのが甲佐短歌会。15人ほどで始まった同会は、

少しずつ会員が入れ替わりながら20年を迎えた。「今は若い方も入会されて、素直で率直な良い歌を歌われています」と上村さん。「川柳、俳句、短歌と、甲佐町はこの会も盛んです。これからも未永く、若い人にも受け継いでほしい」と願う。

満93歳の上村さんは、「以前は、緑川沿いや寒野などを散歩して、歌の題材を求めて風景や季節の移ろいを見て回っていました。今は、わが家の窓から見える庭を毎日眺めて、小鳥の訪れる様子や花が咲く風景を見て歌います」と、窓から広がる庭の景色に目を移す。

普段の生活の中でも、ラジオや新聞の中で、「いい言葉」に出会うとメモ帳に書き留める。「後で、その言葉を思い出して歌を作ってみます。あっち直しこっち直しという感じで、なかなか良い歌はできませんが、とても楽しいものです」と話す。短歌と共に日々を過ごす上村さん。「与えられた命を大事に守って、世間に迷惑を掛けないように、自分が好きな短歌をして、ほけないように」と話す笑顔は、おおらかに輝く。